

投稿

清少納言が見た有明の月
～「をかし」と「あはれ」～

三品利郎（月惑星研究会）

1. はじめに

『源氏物語』は『あはれ』の文学、『枕草子』は『をかし』の文学、と評されてきたが、(中略)『あはれ』は一つのことに感じて、そこから思いが他へひろがり、一段深々と感じる時の、持続的な情緒である。(中略)『あはれ』に対して陽と評される『をかし』は、非持続的な感情だと評してよいはずである」[1]と渡辺実氏は述べている。

「枕草子」は、二か所で「有明の月」について語っている。「有明の月」を一方は「をかし」、他方は「あはれ」と表現している。

ところで、細い有明の月と三日月が季節により横に寝たり、起き上がったりにすることに気付いている人も多いだろう。西中筋天文同好会の上原貞治氏によると「平らに近い三日月が見られるのは春頃です。秋頃には立った姿の三日月が見られます。有明月は、これと逆で、春に立って、秋に平らになります。これは、太陽と月の位置の南北関係によります。」[2]とのことである。

私は、有明の月を「をかし」、「あはれ」と表現した要因には、その時の感情という要素に加えて「月の傾きから受ける印象」があるかも知れないと思いついた。そこで、市販の天文シミュレーターソフトウェア、ステラナビゲータ 11 (アストロアーツ社) を使いこのアイデアの成否を確認した。

2. 「をかし」の有明の月

「十二月廿四日、宮の御佛名の半夜の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけんかし。

日ごろ降りつる雪の今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそむらむら白き所がちなれ、屋の上は、ただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠して、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。(後略)」[3]と「をかし」を使って表現している。「御佛名」は「十二月十九日より三日間、三世の諸佛の名號を唱えて罪障を懺悔消滅する法會」[4]である。十二月二十四日ということは、「十二月二十二日に遅れて始まった第三夜」[5]であり、「中宮主催の御仏名」[5]である。また、この段は「年次不明」[3]とされている。

ほかの段にも、「御佛名」の様子が描かれている。「御佛名のまたの日、地獄繪の屏風とりわたして、宮に御覽せさせ奉らせ給ふ。ゆゆしう、いみじきことかぎりなし。『これ見よ、見よ』とおほせらるれど、『さらに見侍らじ』とて、ゆゆしさにうへやにかくれふしぬ。

雨いたう降りてつれづれなりとて、殿上人上の御局に召して御遊あり。(後略)」[6]である。

二つ段を比べると、「十二月廿四日」の段はどこか寂しげである。寂しい中で有明の月を「いみじうをかし」と感じたのであろう。この寂しげな様子から、定子の実家である中関白家が没落した後だと私は推定する。

「夜半ばかりも過ぎにけんかし」の「けん」は「推量を表す助詞」であるから「御佛名」の法会に清少納言は参加していなかったと考えられる。一時期、清少納言が里に籠っていたころのことかも知れないが、清少納言が再び定子のもとに出仕するようになった長保元

年（999～1000年）に、定子が出産のため平生昌第に遷御していた時と仮定して、十二月二十四日の月を調べることにした。

3. 「あはれ」の有明の月

その段は、「日は入り日。」の段と「星はすばる。」の段の間にある。「月は有明の、東の山ぎはほそくて出づるほど、いとあはれなり。」[7]と描かれている。

歴史学者の角田文衛氏は、「清少納言は『春はあけぼの』と筆を下ろしたが、それは任意の場所における春の曙ではなく、彼女が十年ほど起居した内裏（皇居）の登華殿の簀子（縁側）にたたずんで眺めた東山や北山の春暁の風趣なのである。」[8]と述べている。

同じように、東の山から細い有明の月が出てくる光景も内裏から眺めていたと推定できる。従って、場所は、内裏の登華殿の東の縁側で、年代は、定子の実家である中関白家が没落する前の正暦5（994）年と仮定した。

4. 清少納言が隠棲した月輪

角田文衛氏は、「彼女は父の清原元輔から伝領した月輪の山荘にあって晩年を過ごしていた（『公任卿集』）」[9]。そして「清少納言は朝な夕なに山荘から陵墓を遥拝し、後の冥福を祈願していたに相違あるまい」[9]と述べている。

また、国文学者の山本淳子氏によると、「憶測」とのことではあるが、「月は有明」の段は、「その月がかかる東の山が、平安京においては鳥辺野、定子の墓所のある山だからである。定子という職場を失った後、しばらく経て清少納言はこの東山の一角、月輪の地に住むようになる。明け方、陵墓の方角を眺める清少納言の目が、枯れ果てる寸前のような月をとらえることもあっただろう」[10]と述べている。月は、「波瀾万丈の人生を生きた挙げ句、世の無常を受け入れて逝った定子その人では

ないか。そしてここにもある『いとあはれなり』は、定子の人生と死に思いを致してこみあげてくる感情、やはり鎮魂の思いではなかったか」[10]ということである。

従って、有明の月を月輪から見た可能性もある。

ところが、角田文衛氏は「ほぼ間違いがないのは、皇后・定子の崩後、少納言が遣された三人の幼い皇子女—脩子内親王、敦康親王、嬬子内親王—に仕えていたこと、引き継いでその女房名は少納言、資格は命婦であったことである。」[11]と述べている。すると清少納言が月輪に住み始める年代が違ってくる。そのため、「有明の月を月輪から見た」可能性については検討を保留した。因みに、月輪とされる泉涌寺の境内には、角田文衛氏が建てた清少納言の歌碑[12]がある。

5. 平生昌第から眺めた東側の景色

平生昌第は、「中宮の御所となったため、それは竹三条宮と呼ばれた」[13]。その場所は、「中京区の高田町、船屋町東部、柵町西部にあたっており、中央を間之町通が南北に貫いている」[14]とのことである。



図1 竹三条宮の位置

すると、「図1 竹三条宮の位置」の濃いグレーで着色した北を押小路通、東を高倉通、南

を御池通、西を東洞院通りに囲まれた2つの街区に跨る場所のどこかになる。

そこで、南東の隅になる高倉通と御池通の交差点、図1の★印の緯度経度を国土地理院の地理院地図[15]で調べ、北緯35度0分39.819秒、東経135度45分44.140秒とすることにした。

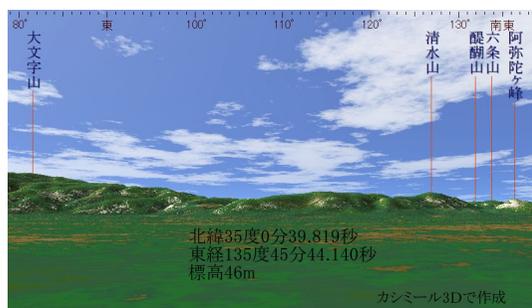


図2 平生昌第(竹三条宮)からの眺め

ここから東側を眺めた景色を、山岳展望ソフトの「カシミール 3D」を使い描いたものが、「図2 平生昌第(竹三条宮)からの眺め」である。東に大文字山(高度約6度)南東に清水山から阿弥陀ヶ峰(高度約3.5度)が見えている。

6. 登華殿から眺めた東側の景色

京都市上京区に「弘徽殿跡の碑」[16]がある。

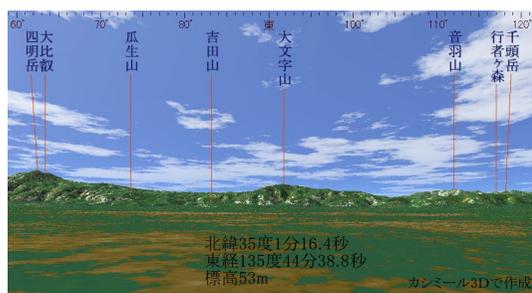


図3 登華殿東縁からの眺め

その約43m北、登華殿の東縁を北緯35度1分16.4秒、東経135度44分38.8秒とすることにした。

「カシミール 3D」で登華殿の東縁から東側の眺めを描いたのが「図3 登華殿の東縁からの眺め」である。ほぼ真東に大文字山(高度約3.5度)が見えている。

7. 東の山から出る有明の月

Webサイト「こよみのページ」にある「和暦年別表」[16]で正暦5年の春秋の27日のユリウス暦を調べ、ステラナビゲータ11を使い月の出の方角を調べたものが「表1 正暦5(994)年の有明の月」である。表頭の日出は地平線からの日出時刻、月出は地平線からの月出時刻、月出2は東の山際から月が出終わる時刻、差は月出2と日出の時間差である。この時間差を考慮すると春は薄明の明るい空で月を見て、秋は天文薄明が始まる前の暗い空で月を見ることになる。薄明の空ではなく、暗い空で東の山から昇る有明の月を見たのではないかと、私は考える。

表1 正暦5(994)年の有明の月

和暦	J暦	方角	日出	月出	月出2	差
2/27	4/10	東微南	5:24	3:44	4:04	1:20
3/27	5/10	東	4:51	3:19	3:45	1:06
4/27	6/8	東微北	4:38	2:21	2:43	1:44
8/27	10/4	東微北	5:57	1:35	1:58	3:59
9/27	11/3	東	6:25	2:34	2:58	3:27
10/27	12/2	東	6:53	2:30	2:55	3:58

8. 長保元年12月24日の月

同じく「こよみのページ」にある「和暦年別表」[17]で調べると、長保元年12月24日はユリウス暦で1000年2月2日になる。

2月3日の午前3時40分の様子をステラナビゲータ11で描いたものが「図4 平生昌第から見た有明の月」で、月を拡大したもの

が「図5 1000年2月3日、月の傾き」である。分度器で測ると水平から約41度月が傾いている。



図4 平生昌第から見た有明の月



図6 登華殿から見た有明の月

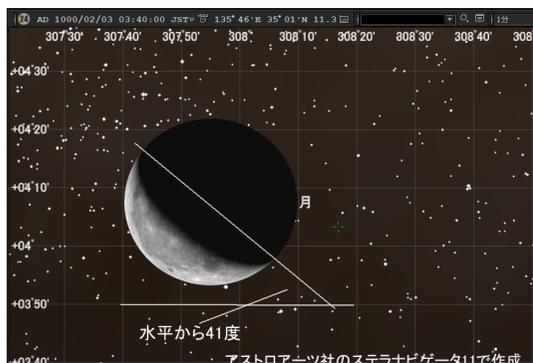


図5 1000年2月3日、有明の月の傾き

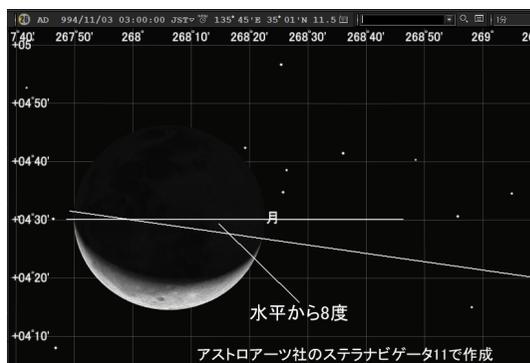


図7 994年11月3日、有明の月の傾き

9. 正暦5年9月27日明け方の月

秋の有明の月と仮定した。上原貞治氏の「平らな三日月」[2]の予報に掲載されているデータから、有明の月が平らになるのは現在の暦で9月から11月だとわかる。

長保4年9月27日(ユリウス暦994年11月3日)には東の方角から月が出るのがわかった。そこで、11月3日の午前3時の様子をステラナビゲータ11で描いたものが「図6 登華殿から見た有明の月」である。東の大文字山から出た直後で、「東の山ぎはにほそくて出る」[7]という様子が再現されている。月を拡大したものが「図7 994年11月3日の

有明の月の傾き」である。月の傾きが平らであることは一目でわかるが、分度器で測ると水平から約8度であった。

10. まとめ

図5に示したように「をかし」と表現した月は水平から約41度の傾きで水平からヒョッコリと起き上がっている。

また、和暦12月24日(御佛名の日)に対応するグレゴリオ暦とユリウス暦は「表2 正暦4年から長保元年の12月24日」のようにグレゴリオ暦の1月下旬から2月上旬である。従って、長保元年より前の年だとしても、春の立った有明の月を見たのであろう。

対して図7のように「あはれ」と表現した月は水平から約8度であり「をかし」の月と比べると平らに寝ている。

月齢 25 から 29 の月が東の山から出てくるのは春 4 月から 6 月、秋 10 月から 12 月にかけての期間である。春は、薄明の中に立った有明の月が見える。秋は薄明が始まる前の暗い空に平らな有明の月が見える。「月は有明の、東の山ぎはにほそくて出るほど、いとあはれなり。」[7]と描かれたのは、秋に東の山から出てくる細い平らな有明の月であると考えることにより、図 6 のような景色になる。

有明の月を「をかし」、「あはれ」と表現した背景には、その時の情景や感情という要素に加えて「月の傾きから受ける印象」という要素も可能性があるだろう。

表 2 正暦 4 年から長保元年の 12 月 24 日

和暦	グレゴリオ暦	ユリウス暦
正暦 4	994 年 2 月 12 日	2 月 7 日
正暦 5	995 年 2 月 1 日	1 月 27 日
長徳元	996 年 1 月 22 日	1 月 17 日
長徳 2	997 年 2 月 9 日	2 月 4 日
長徳 3	998 年 1 月 29 日	1 月 24 日
長徳 4	999 年 1 月 19 日	1 月 14 日
長保元	1000 年 2 月 7 日	2 月 2 日

文 献

- [1] 渡辺 実(1991)、新日本古典文学大系 25 枕草子、P388-9、岩波書店
- [2] 上原貞治 (2002)「平らな三日月」の予報、(<http://seiten.mond.jp/mikaduki/mikaduki.htm>) 西中筋天文同好会 HP (<http://seiten.mond.jp/>)
- [3] 校訂、池田亀監 (1962)、枕草子、岩波文庫 30-016-1、P327、岩波書店
- [4] 校訂、池田亀監 (1962)、枕草子、岩波文庫 30-016-1、P100 の脚注五、岩波書店
- [5] 渡辺 実(1991)、新日本古典文学大系 25 枕草子、P324 の脚注二八と二九、岩波書店
- [6] 校訂、池田亀監 (1962)、枕草子、岩波

- 文庫 30-016-1、P100、岩波書店
- [7] 校訂、池田亀監 (1962)、枕草子、岩波文庫 30-016-1、P279、岩波書店
- [8] 角田文衛 (1991)、平安京散策、P13、京都新聞出版センター
- [9] 角田文衛 (1991)、平安京散策、P155-156、京都新聞出版センター
- [10] 山本淳子 (2017)、枕草子のたくらみ、朝日選書 957、P270、朝日新聞出版
- [11] 角田文衛 (1991)、平安京散策、P25-26、京都新聞出版センター
- [12] 角田文衛 (1991)、平安京散策、P223、京都新聞出版センター
- [13] 角田文衛 (1991)、平安京散策、P44、京都新聞出版センター
- [14] 角田文衛 (1991)、平安京散策、P46、京都新聞出版センター
国土地理院、地理院地図
<http://maps.gsi.go.jp/#18/35.011229/135.762514/>
- [16] フィールド・ミュージアム京都、いしぶみデータベース、上京区、平安京弘徽殿跡
(<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/html/ka127.html>)
- [17] 「こよみのページ」にある「和暦年別表」(<http://koyomi.vis.ne.jp/9reki/otonidix10c.htm>)



三品 利郎

<http://tm-amateur-astronome.la.coocan.jp>
<https://www.youtube.com/user/TshrMishina/>
<https://www.flickr.com/photos/tsrmishina/>